

史料室だより No. 34 東洋英和女学院史料室委員会 発行 1990年4月12日

特集：幼稚園とともに

母校幼稚園に勤続12年間の回想(続)

第2部 戦後平和になって

元幼稚園主任 宮崎 千恵子

昭和21年6月21日、幼稚園再開、園長功刀先生のもとに私1人保母、そして、師範科実習生3名、26名の園児が集まりました。疎開していた子供達が次第に帰京して、平和な時代になりました。その年の1年間私が1人で遅く迄翌日の準備をして居りました時、お二階に住んでいらっした、外崎先生ご夫妻が温くねぎらって下さいました。翌22年4月より1年間、明朗で美しい、辻百合子先生(師範科卒)に恵まれ、功刀先生の合理的な御指導を頂き歲月はすぎました。

(附記)

(1)昭和22年

カナダより帰国されたミスローク先生が、幼稚園の園児達に宗教々育をなさいましたのもこの頃でした。

「よきサマリヤ人」のフランネルピクチュアはお人形が布に付いてお話が進みます。

したので、私共も子供達と共に驚きました。

昭和23年4月、幼稚園長に長野彌先生を仰ぎ愈々新しい門標「東洋英和幼稚園」となりました。長野園長先生は、幼稚園児の父母に行き届かれた配慮をなさいました。スチーム暖房設備を付けて下さったのも、数ある配慮の一例です。園児の健康管理には、常時宮部黎子先生、課外ピアノの御指導に加藤信子先生、鈴木才能教室ヴァイオリンも設置されました。



昭和28年3月保育証書修了式

後列右から5人目、長野彌園長、保育指導スクルトン先生、主任宮崎(旧高橋)先生、教諭杉山、小崎、小泉の各先生。(長野先生の前、藤田均氏)

(附記)

(2) 本校中木・菱谷両先生、入園願書受付の当日、園玄関にて御指導下さる。追々と園も充実の途上。

毎週月曜日、長野先生来園の日、子供達は、口々に「えんちょうせんせい」と喜び集まりました。長野先生ご夫妻は、私共教師達にも公私共に温いご配慮をなさいました。

(附記)

(3) 昭和23年11月28日付をもって、東京都主催教員再教育講習会修了証書を保母達は授けられました。毎年猛暑の夏中を励みました。キリスト教保育連盟 佐藤初重先生の御尽力多々あるものと私共感謝致しました。

(4) 小学部長外崎校長先生は毎年卒業園児全員面接御指導下さいました。

昭和23年には杉山澄子先生、神谷久子先生の協力を得て、翌々年には小崎和子先生が(神谷先生退職のあと)就任致しました。先生はピアノがお上手で温なお人柄信仰心の厚い方でしたから私共教師にも子供達にも沢山の心の糧をいただくことが出来ました。

幼稚園も次第に充実安定の日々でした。昭和25年5月5日、端午のお節句の朝、幼稚園の前に大型バスがNHKより迎えに来て、年長組の園児が放送局に行きました。この時代はまだテレビもなく、ラヂオだけでした。「お玉じゃくしと鯉轆り」という童話劇に出演の為、依頼があってから毎日、先生3人と子供達は全員一言ずつの言葉に練習を重ねました。放送局ではさほどリハーサルもなくてよい本番となりました。

杉山先生が子供達の立つ後で、ひとりひとりの背中をさわって、合図をなさいました。子供達は順番を間違えずに上手に出来ました。杉山先生が、音をたてずに横歩きなさりながら、この作業をな

さるのには、相当に心労を重ねられたことと察しました。小崎先生の静かな曲と共に、高橋(私)の朗読、滞りなく終了。皆で心をあわせて緊張したあとの喜びは、今も尚大切な思い出です。この朝出演児のお母様達も、ラヂオの前で全身耳にして聴かれたそうです。

昭和26年より29年迄、スクルトン先生が保育指導をして下さいました。(『東洋英和女学院70年誌』122頁～135頁に記載されてありますので御覧頂ければ幸いです。)此の度の原稿には先生のエピソードなどを記したいと思いません。スクルトン先生は日本語が大層お上手でしたが、時に私共教師に注意なさる場合に、次の二言が英語で強く私共の心に入ります。“Your responsibility”と“Safety first”

スクルトン先生はご自分で常にすべての事に完全に(近く)計画実行なさいましたからこそ、このように私共にも仰云ることがお出来になったと思います。心の優しい先生のお人柄は折にふれ私共よくわかって居りました。

ここに私のなつかしい思い出を書きたいと思えます。それは、近日中の行事遠足の為に放課後、先生3人と動物園に下見に行きました。その翌日のことでした。保育中のお話の時間に、私は年少組の子供達の前で、昨日見て来たライオンの真似をして見せていました。子供達は拍手してよこびました。その最中に、スクルトン先生が何かのご用で幼稚園においでになって、私と子供のその様子をご覧になって、その日の午後の教師会で、先生は私に仰云いました。「高橋先生、あなたは子供達に、とてもよくわかる言葉を知っていますね、お話は上手ですよ。けれども、本当の遠足の日に、動物園のライオンが、もしアナタのように上手にできなかったら、子供達は失望するでしょうね。前にアナタがあまり上手に、してみせない方

。。。
がいいですね。』……（なつかしい思い出です。）

毎週水曜日、スクルトン先生は、年長組に英語のうたを教えて下さいました。電話の歌を教えていらっしゃる先生のお写真を、ここに掲載します。（小崎和子先生より拝借。複写させていただきました。）今は亡きスクルトン先生のお姿をお偲び頂けると思います。一つ事に熱心になさるお姿が今更のように思い出されます。次の英語の歌は黒田成子先生に spellingを確認、御親切に教えて頂きました。

Ring-a-ling-a-ling,
Here the telephone ring,
I take up the receiver,
Hello, Hello, Hello.

（附記）

(5) 長野先生、スクルトン先生の御配慮にて、本校の荒井千代さん、池田さん方が専任お掃除として協力。私共教師は、保育に専念することが出来るようになりました。

(6) 黒田成子先生は、当時保育短大の実習生として、幼稚園に協力してくださいました。宣教師の男のお子さんピリーちゃんが日本の子供たちといっしょに遊び、習慣や、子供の生活、ことばを覚える為に在籍して居りましたが、黒田先生は、英語をよく理解される方でしたので私共教師は助かりました。

昭和28・9年には、幼稚園の先生に、小泉・近藤両先生（短大卒）の若く明朗な雰囲気も加わり、園児も潑らつと元気な声は満ちました。私共午後には園児の帰ったあと、保育科短大のスクルトン先生のリズム授業に助手を致しました。ピアノの曲をきいて自己表現することを体を通して学びました。早速幼稚園にて役立ちますます楽しく保育内容が豊かになりました。

昭和30年3月16日、東洋英和幼稚園保育証



スクルトン先生の英語の歌
“Ring-a-ling-a-ling”
と年長組の子どもたち。

書授与式をもって、私は退職致しました。万感交々、永い歳月の思い出、喜び、悲しみ、すべて感謝のうちに守られ暮して来たこの幼稚園の建物、賑やかな子供達の姿もなく静かな夕べ、退職の最後の玄関をしめて、門外に立ち、一人おのずと足は前に進みませんでした。思えば戦災家屋焼失の為、長野先生の御配慮で母と共にこの小さいお部屋に住みまして以来、癌の為永眠致します迄、蔭になり私を励ましてくれた母の恩を忘れることが出来ません。私の心の奥に、母との思い出も大切に抱えて東洋英和幼稚園を去りました。

昔想う　ここは故郷　雁の夢

第3部 祈りは永久に

旧幼稚園舎の面影を懐しみ回想を綴って参りましたが、諸先生、先輩皆様のお祈りに支えられた私共の時代を経て、新しい幼稚園舎に移られ献身のお働きをなされたジュテーン先生、黒田先生、

荒牧先生を仰ぎ若き後輩方が継承され、愈々百周年の佳き日は2年先に迫りました。私共は心を一つにして神様に祈り、力を与えて頂きますように励みたいと思います。

完

(1982年2月記)

(附記)

毎年5月3日、保育部会を故児玉光子先生御生前中より現在迄郷司ふじ子先生はじめ諸先輩の御指導を頂きまして、当旧幼稚園舎にて催されました。

現在では、郷司先生は昔のことを最も御存じの方と尊敬申上げて居ります。



保育上年令に適した遊具が重要と見直され、大きな積木が取り入れられた。右はじ山田(旧近藤)陽子先生。

私にとっての英和幼稚園

昭和29年卒園 藤田 均

丁度30年前の昭和27年、私は東洋英和幼稚園に入園した。私達の年代は「戦災の落し児」といわれた人口がふくれ上った年に生まれた世代で、いわゆる「揺り籠から墓場まで」競争社会を運命付けられていた。そのような世代の社会生活の第一歩である幼稚園がこの英和であったということは、その後の人生にとってすこぶる意味深いものであったと今にして思えるのである。それは3つのこと、キリスト教の宗教心、人格(個性)の尊重、

それに自由の素晴らしさを教えられたからである。卒園後、私は英和を離れ公立、国立の学校に行き、



幼稚園卒園後はじめてのクラス会で(昭和31年)。後列右から3人目が藤田均氏、となり小泉先生、前山田先生、同列左から3人目杉山先生。

その中でキリスト教から離れ、いわゆる競争社会の中で詰め込み教育を受けた。社会にでて国家公務員という巨大な組織の一員に組入れられてしまって自由を得にくい境遇にある。しかし、なお、学生生活においては競争をいささかも意識しないで済み、現在においても自分というものを見つめ、自らの良心(神に対する心)に恥じない生活を過せる幸福を確信するものである。これらは英和の教育の賜物と感謝している次第である。宗教心と個性の尊重と自由の素晴らしさとはその後の学生時代では教育されないものであった。だからこそ自らを問い直して、自らが自らの人格形成を行うことが必要だと立ち上った学生運動(いわゆる“大学紛争”)に共鳴したと思えるのである。私にとって幼稚園での教育が、わずか2年であったにもかかわらず今だに強い影響を持つ。言葉を替えていえば現在の私の多くを形成していると思えることに今まで不思議を感じていたところ、たまたま今年(1983年)3月5日英和幼稚園父の会で、日赤病院精神科赤星進先生の御講演を聴く機会をいただいた。その中で「3才から6才までの間に、人間は自我の形成を始め、そして完成してしまう」とのお話に、そうだったのかと長い間の疑問が解けた思いがした。

次に、当時の思い出のいくつかについて述べたいと思う。

当時の六本木 当時の六本木には、まだ多く空地が存在し、そんな中で原っぱでは草を結んで鬼ごっこをし、結んだ草に足を取られ転んだりしたことがなつかしく思いだされる。六本木の交差点付近の店屋といえ、今もある本屋さん、花屋さん、当時は平屋であったおそば屋さん位のもので、交差点より幼稚園までの間には、今は無くなっている骨董屋が2軒位と、今のロアビルの東の焼

肉屋さんの所にあった木村屋パンがあっただけであった。都電が通っていた時代で、車の渋滞など思いもよらないほどロアビル前の道路は空いていた。

幼稚園舎 そんな中で木村屋パンの2軒隣りに、西洋館のようなたたずまいの、当時としては高い、一部2階建ての建物が、私達の通った英和の幼稚園であった。現在の幼稚園舎ができてからはしばらく同窓会館として使われ、昭和56年末に取こわされた。

庭の中央には築山と2、3メートルの小さな池があり、入口付近には藤の木の隣りに半円形のパーゴラがあって、そこで私達はブラ下ったり、上を歩いて遊ぶことができた。

園児数 1学年の園児数は、現在とほとんど変わらない36人の2クラス制で、うち男の子は14人、園長は高橋千恵子先生(現姓宮崎氏)、担任は杉山澄子先生(現姓斎藤氏)と小泉洋子先生(現姓倉持氏)であった。この数は、その後公立の小、中、高校において1クラス50人余が一般であった。これも昭和22、23年生まれの年代の者として、生徒数と学校数からみてやむを得ないと納得する者として、驚異的な、そして子供の個性を尊重している素晴らしいものであった。

名前の呼び方 幼稚園でも名前の呼び方は苗字を女の子はサン付けで、男の子はクン付けで呼ぶことが一般であるが、英和では男の子も女の子も区別なく名前をチャン付けで呼び合った。このチャン付けの習慣は現在も英和幼稚園に続いている。なお、私達は今だに同窓会で苗字ではなく名前をチャン付けで呼び合っており、これがとてもなつかしく、名前を呼ばれたとたんに昔に戻った

気持ちになる。

日曜学校 日曜学校は、英和の幼稚園で行われ、担任の先生が日曜学校の先生もして下さった。お話にはほとんど紙芝居が織り混ぜられており、楽しく、また、帰りにはとてもきれいなカードをいただいた。天国に行きたくて、聖書の言葉を絶対としたが、一度失敗したことがある。それは、ガキ大将とけんかをし、なぐられたとき、「右の頬を打たれなば左の頬も向けよ」という言葉を思いだしてしまったことで、結果的にもっと強く平手打ちをされてしまった。

授業 先生は、今と同様、丁度ベストセラーの黒柳徹子氏の『窓際のトットちゃん』にでてくる先生と同じように、とても優しく、また、生徒がしたいことを自由にさせてくださった。全員で何かを強制されて教わるということはほとんどなく、男の子は1日中紙飛行機の飛ばしっこをしたり、1つが50センチもある積木の投げ合いや陣取り合戦をしたり、砂遊びをしたりして遊んだ。その脇で、女の子はおままごとをしていたが、部屋のコーナーの相当部分に畳が敷かれてあり、ままごと道具も大型の、本格的な木製のものだった。気が向けば男の子もおままごとに加わって、自分達のフィクションの世界で遊んだが、このことは大人になってリーダーとして、協力者として、社会における役割を果たす上でとても大切なことであった。

絵についても、何も指導されず、描きたいものを自由に描くことができた。そのためか、バックを赤い、丸い太陽のある夕焼け空とし、緑の山を2つ描き、前面には野原か又は畑の中に、山に至る路がある。夕陽の近くには雁が3羽か4羽、ねぐらに帰っていく、といった同じ風景面を何ヶ月

も、何百枚も描き続けたことがあった。小学校に行ったらたん、昼間の空に赤い太陽を描いて、先生からそんな赤い太陽が実際に見えるのかどうかと空を観察させられた。それ以来、赤い太陽を描かなくなったが、英和の先生も、きっと注意したかったのではないだろうか。

皆で何かをしたといえば合奏と遊戯位であった。合奏といっても練習は不要で、先生のピアノに合わせてトライアングル、シンバル、太鼓、鈴といった打楽器をリズムをとって叩くというだけのことであった。遊戯も、先生のお話に合わせて靴屋になったり花屋になったり子供達流に演じるだけのことであった。

遠足でも「前へならえ」とか「気をつけ」とかいわれ並ばせられたことは一度もない。それでもちゃんと皆で行動ができていた。小学校でこれを散々やらされる度に、遠足とは何と堅苦しいものかと思ひ、幼稚園をなつかしく思いださずにはおられなかった。

なお、当時絵本というのがほとんど無く、子供向けの本として、皆「キンダーブック」を読んでいた。

お弁当と給食 昼のお弁当は、赤や白の竹製のバスケットに入れて持って行った。冬はスチーム暖房の上に吊下げられた大きな金網のカゴの中に入れていただき、いつも温かく食べることができた。給食は1ヶ月に1度位であった。いつも遊んでいる幼稚園のホールから、ぞろぞろと階段を上って2階に行くと、急にとてもいい匂いがしてくる。先生について1列になって、そのときだけは神妙に席に着いた。お母様方が作った当時としてはめったにお目にかかれぬ、サンドイッチとかスープがでてきた。また、角砂糖とか紅茶も大変なごちそうだった。いつも大変おいしく、給